

微 調 整 論

——原理的探求の試み——

(Ⅲ)

長尾史郎

一 資 料

資料(1) 覚識と影響受容

前回(Ⅱ)で、物の強さ・弱さと感受性の関係について論じたが、それといささか関連しそうな議論を発見したので記しておく。

「あらゆる物体は、よし覚識(sense)を持たないにしても、表象(perception)を持っている、ということには確かである。なぜなら、一つの物体が他の物体に出会うとき、好ましいものを抱き、好ましくないものを排除または排斥する一種の選択が行われる。そしてこの物体が変化しつつあるうとすでに変化していようと、つねに表象は行動に先立つ。さもなければ、すべての物体は互いに似通ったものになるであろうから。そして、ある種の物体においては時としてこの表象が覚識よりもはるかに鋭敏であり、したがって表象に比して覚識がまっ

たく鈍いものにすぎないことがある。たとえば、晴雨計は、われわれが発見しないのに、寒暑の微細な相違を発見する。……したがって、比較的鋭敏な表象について研究することは、大いに立派な研究題目である。なぜならば、それは覚識と相携えて自然を開くいま一つの鍵であり、時としては覚識に優る鍵であるから。……」〔フランシス・ベイコン『森の森』(Silva Silvarum) 第九節]

……ベイコンが一方において表象、即ち影響受容(taking account of)他方において覚識、すなわち認知的経験(cognitive experience)の区別を立てている注意深いやり方に心を留められたい。(A・N・ホワイトヘッド著、上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』、松籟社、一九八一年、五四―五ページ。強調は原文)

資料(2) 「心ならずのテクニーク」

同じく前回(Ⅱ)の行論中の、本人の意思に逆んでも自己を発揮す

るテクニクについて、以下のような恰好の文を見付けた。
 「守（まも）はもと都の歌の家（うたのや）にうまれた。うまれながらに、先祖代（せんぞ）代（よ）あつ、かひなれた歌といふものが、因果にも身（み）について、みたやうであつた。五歳のときから基石をならべるやうに三十一字を置きはじめて、はやくもうたひぶりにおとなびた手が見え、すこぶる父の意になつた。父はうちつけには褒めなかつたが、ひとには自慢して、

『宗頼はいつれ勅撰の集の撰者ともなるべきものぢや。』

げんに、亡祖父もその撰者をつとめたといふ系譜があつた。しかし、それがなにか。うまれぬさきの世からうまくつくれるにきまつた歌を、どうしてこの世のかぎりつくりつづけなくてはならぬのか。宗頼はこどもごころにさうおもつた。そのくせ、さうおもふそばから、ことばはいせんに歌となつてくちびるにうかんた。

「宗頼のほうでは、そのときかぎり、歌をつくることはふつりやめた。いや、歌は抑へようとしてもあひかはらずいせんにくちびるにかかびがちではあつたが、そのいひまはしを案じて五言七言のかたちにとまとめるといふ操作は、みづからつとめてこれを禁じた。」（石川淳『紫苑物語』、講談社、一九五六年、九七―九八ページ。強調は引用者）

二 女性に関することになった九章

—— Z・N教授の御下問にお答えして ——

第一章 昔も想像馳る女有

西鶴の五人女を見ているのですけど、江戸時代には少なくとも、男

女の關係とは性愛だということに一瞬たりとも疑問の余地などなかつたのね。梅屋の想いをかゝから聞かされたおせんは、直ちに彼との伊勢のぬけ参りを決めますし（巻二）、おさんの破滅の元になった腰元りんは、灸を据えて苦しむ茂右衛門を見て「かなしく、「灸を」もみ消して、是（こゝ）より、肌をさすりそめて。いつとなく、いとしやとばかり思ひ込（こも）人しれず、こゝちなやみける」といった具合ですし（巻三）、あのお七にしても、吉祥寺に避難していた吉三郎の手の刺を抜いてやうて手を握り合つた、それが馴れ初めの総てなのよ（巻四）。（いま岩波文庫で見てるの。）そして、逢い引きとは直ちに「契る」ことなによね。でもこんなこと、馬鹿みたいに当たり前で、今さら言い出すと却って可笑しくらい。

でも、現代ではどうなのかしら。今でもこのことに何らの疑いはないようでもあるかと思えば、逆に、この事実が明らかになる現場に異常な興味を示すのを見ると、そんなに珍らしいことなのかしらなどと考えたりするの。だから、最近の風潮など、いっそ偽善が無くなつて良いとさえ思うわ。でも、もう一度考えると、それに新味があるように見えるのは、実は、本来はありもしない、ないしは尊重もしていないタブーの「裏をかく」スリルだけという気もするのよね。例えば、私の男子学生なんか私が自由に口をきかせておくと、ひとの顔見て「僕なんか不自由してません。」なんてのろけを言いに来たりするけど、あれは実は、自分だけで充足して楽しむ能力がないことを曝け出しているの、他人とのコントラストとしてしか自分を計る尺度を持ち合わしてない哀れな存在なのね。

——なかなか彼女は手厳しい。ここで私は話を本来の方に戻すよう促した。つまり、彼女に、彼女が、見たところ、男性は女性を、あるいは男女の仲をどう考えているように見えるかを語ってくださるように頼んでおいたのである。知られるように、彼女は「女としては」「済みません」ずばずば言う方なのである。彼女については、文学関係の専攻で、歳は四十代で既婚とだけ言っておく（私にはこの方面ではまだ「タブー」が多いので）。これからは話の腰は折らないことにしよう。

第二章 「体験的」男性論——発端

そりゃ、私も職業柄、色々読んだことはあるけど、それを話してもつまらないし、第一、私がどう考えるかという「課題」の答えにはならないから、やっぱり私の「実感」を述べるしかないでしょ。でも、私が「経験豊富」だなんてことはもちろんないから、——困ったな。それに、私がどう思ったかなくて、相手（あるいは男性一般）が私（同じく女性一般）をどう思っているかと思うかというのはなかなか難しい。

私って、もう「古い時代」に片足突っ込んでるでしょ。だから、今の人には想像もつかないようなこだわりがあったりしたものだけど、この点、あなたには分かってもらえらると思うわ。「これは私の歳のことを言うのである。」

初めてかどうか、とにかく高校の時、素敵な人がいたわ——今の彼じゃないのよ。西鶴のことなんか言い出したのも、彼のことが頭にあったせいかわら。男女の仲とは性だということの認識は浮薄に導くの

でなく、昔だから（そして田舎だから）かも知れないけど、恐ろしく堅固しいことになるのね。彼なんかも、それ以外の考えはできないよ。うだったし、私もそれは理解できた（あるいは、今なら理解できる）のだけれど、それにしても私には息苦しさの方が勝ってしまつて。それは、今言つた、性についての考え方と、結婚と性との一義的な結び付きという観念とが合わさつた結果なんですよ。今なら彼でももつと自由に考えらると思うわ。

ところで、男性には knight の心象があるでしょ。あれは、フェミニズム（およびそれを生じさせた社会組織）の産物なのかしら——例えば今なら女のナイトが出たりして（でもそれはやはり「母性愛」の形を採るのでしょうね）。いずれにしても、この心象は青年のもので、中年のナイトなんて様にならないでしょ。うちの人の高校の頃の日記を覗いたことがあるのだけど、彼はこんな夢を見たことがあるのね。日も落ちた野原に果してもなく真直ぐに続く黒い道が眼前に伸びていて、両側は雑草の繁る溝になつていて、水だけが薄白く光っているの。その道の手前の方の高い路肩から溝に掛けて裸の女性が頭を下にして倒れているの（これは私とは無関係よ）。彼はこの女性を「救つて」やるといふ使命感を覚えて目が覚めるのだけれど、それが具体的にどういふことを意味するのかというと、どうやら彼女を衣服で被つて介抱するといったことらしいのね。これもナイトの心象の一変種じゃないかしら。ツルゲーネフの『初恋』をちょっと読み返してみたけど、ここでもこの心境のようなものが激しく書いてあるわね（不特定の「敵」に対する攻撃性といった形で）。

高校の彼との結果？、「悲恋」よ。でも、もう大学で別の人を見つけていた彼とある雪の晩、S湖の回りを歩いたの。彼は泣きながら私にすがのだけれど（「未練」ね）、私も絆されて雪の中に抱き合って倒れたの——でもそれだけ。彼って（男性一般ではないんでしょ？）可愛そうなほど「志操堅固」（つまり新しい人に対して）だったのね。でも今でも尊敬はしているわ。

——どうも、余りに「実感」に過ぎるようである。で、「今の彼」をどう観るかも聴きたくなったが、彼女はマイペースで……

第三章 男性と家庭

人間は、「本来」というものを失った生物よね。私、物覚えが良い方で、小学校か何かで、人間にとつての快適気温は十六度というのを習ったことがあると思ったけど、誰もこの数字を肯定してくれないの。ところが先日、或る本を見たら、この適温が歴史的に徐々に変化していて、十六度ではなかったけど、一頃に比べて、今では数度も上の値だという記述を見つけたの。こんな基本的と思われることでしかりだから、男女間に「理想値」なんか無いのは当然よね。早い話が、男女の美学だって、昔は何といっても女性の弱さ（社会的、肉体的）が基本になってたでしょ（ただし、私は、客観的「事実」としてこれを言ってるんで、何とかリブはもとより、これを恩着せがましく利用する人連のことは考えたくないの。むしろ、私はほとんど昔を礼讃して言っているの）。昔でも強い女は居たというけど、手に負える限りは、それは「おきちゃん」その他の美の範疇にうまく入ったの。けれど、今

は実質的に女性が社会的に強くなったのに、美学は変わらないから、いたるところ悲劇ありというわけでしょ。

もっとも、さっき性と結婚とについて、男の古さみたいなことを言ったけど、私はある意味でもっと古いわ。例えば今、小学校などで性教育云々と言うけど、あれはみな「目的論」、つまり、繁殖のためだとしか言えないでしょ。でも、うちの女なんか、人間はそうではない（せいぜい、子宝に恵まれない人の場合にそれが露わになるような態のものだ）と言うの。この点で、私達、一番対立するのね。私はやはり、その点については断固「目的論」であるべきだと思うの。この点で、彼は驚くべく冷酷無残よ。それは、子供が「嫌い」というのとは違うらしいわ。「嫌い」だとしても、それは、むしろ彼の優しさと関係するのだけれど、子供が気に掛かると、気を抜くことができなくなつて、他を全部抛つようなことになるから、いっそ居ない方が善いといった感じ。それは私に対しても同じで、「赤の他人」扱いらまだしも、それを通り越して、まるで邪魔物扱いのようなことがしょっちゅう。もう一つ、「嫌い」だとすると、今の「優しさ」とどこでどう折り合うのか知らないけど、子供の持つ甘さ、もどかしさ、未熟さが（子供が——特に個々の生きた子供が——というより）嫌いといったこともあるみたいなのよ。特に、教えるという点で外でエネルギーと堪忍を強い切っているせいかな、子供に対しては男のヒステリーができるのよ。

——彼も教師なのだ。話が自然に「彼」の方に向かったので、少し意地悪く持ち掛けてみた。——

第四章 浮気の無い沢

そんなこと、あなたが自分の胸に手を当ててみれば分かることじゃないの。でもね、うちの人に限ってそんな心配はないの。どうしてかって言うと、もの凄く彼、「我執」が強いからよ。例えば、仮りに相手が女優だって落ち着いて「鑑賞」なんかしていられないのよ。なぜって、自分のものにもならない物を賞めて何になるかってわけ。(スポーツを見物するのが嫌いなのもこれと関係あるらしいわ——自分が何もできないことがそもそも原因らしいけど。)そして一方では割と淡泊だから、自分のものにしようという努力はほとんどしないの(これは、実際は、事物に対する態度を観察した結果として言ってるのよ)。すると、当然、始めっからあなたのものになりますなんて言う「美人」が彼の所にやってくる筈はないから、結局何も起こらないってわけ。要するに、ほとんどその点では異常よね。でも、それだけに、それはものすごい真理を衝いていると言えなくはないわね。「第九」にもあるでしょ——

Alle Menschen werden Brüder

(und Schwestern) だけど)もしこんなことになれば、確かにこの世には有り余る「愛」があつて、美も醜も、老若、貧富、地位も「趣味」の差も無くなって、それこそ „seid umschlungen, Millionen!“ という一種のディオニソスのorgyの世界が現出するって訳ね。でも、現実にはみな右のような障壁のぶつけっこをしてるのね。でも、そんな世界イメージを個々人の身の処し方に「適用」するのは、いずれに

しても馬鹿気してるわ。男の人ってのは、みな——あなたも含めて——そんな一種現実離れた想念を持っているものかしら。とにかく世の中のそんなせこまじさが堪らないという彼の気持ちは分らないくはないわね。

もつとも、そんな彼でも、一度ばかり危くなったときがあつたわ。子供が出来てわたしの関心がお留守になったときの空隙みたいなのが彼の心に生じたようね。でも、馬鹿みたいに、相手の親の家までいっしょにこのご遊びに行ったりするぐらいだから、始めっから八方破れで、何にもなりやしないのよ。という訳で、全然心配いらぬの。でも、その彼が、阿呆みたいになって腰抜けみたいに一途になつたときがあつたのは。それは、わたしと……(——あら、おのろけじゃないわ。あなたがありのままを話せて言うから——もう止すわよ) 本当なのよ。大学の勉強なんか、文字通りひとつも手につかない感じ。野良犬みたように後を付け回すし。会えば、何時間でも黙りこくって目をつむって据わっているし。彼自身さえ、時々言つたものよ——二十代で達成したことがあつたとすれば配偶者を得ただけだつて。そのせいもあるのよ、もうあんなごたごたは御免被りたいのよ。だから「浮気」なんて二の足踏むのね。私だって、彼に巻き込まれて感じて、二度と面倒くさいことは嫌だわ。早い話が夫婦喧嘩だつて、普通の人は式を挙げてからやり出すけど、私たちなんかその前に十年くらいやり通した前歴があるから、今なんか散発的「紛争」以上に拡大せず済むのよ。このプロセスをもう一度繰り返すことを考えただけで百年の恋だつて冷めるのじゃないかしら。

——とても文学専門とは思えない素朴なお話が続くものである。ところで、男女の差について男性はどう考えているかについては、どういってお見立てであろうか——この際、「実感」でも構わないから。

第五章 相互評価について

男子、学生だけど、私にこんなこと言ったことがあるわ。スターでも「素人」でもいいんだけど、男女ひと組みの並んだ写真を見ると、女の方が不釣り合いに立派に、眩く、「大きく」（これは物理的に文字通り大きく見えるのも含むの）見えることがあると言うの。あなたはどいう？ 私に男の写真についてそう感じるかどうか、思ってみたことが無いから分からないわ。で、これを分析してみれば、やっぱり、一つはその男性に対するやっかみでしょうね、無意識の。だから、先程、うちの人の「我執」のことを言ったけど、誰にでも多かれ少なかれそれはあるのね（だって、全くの他人をやっかむのですもの）。もう一つ、それを離れても、やはり、男女共でしょうけど、異性は、常に何がしかは、未知の魅力を備えた存在なのでしょうね。だから、仮りに、先程の「ペア」の写真が、確率から言って、大体、*same*、同士のものが多いとすれば、その「平均」ないし「代表」の男性よりも女性を高く評価するということは、これは結局、全ゆる「レベル」の男性が（自分の「レベル」の）女性を自分より高く買っているということにはならないかしら。女性側からだって同じことが言えるような気がするわ。もっとも、「高く」かどうかは分からないわね。単に「異なつた」ないしは「補完的」という感じなのかもね。

第六章 奸計について

女は姦策を弄するというのが通り相場ね。でもこれは、さっき言った女の弱さを補うための必要悪という感じはするわね。ただ、男性はこれをもって女性を定義してしまった気ではしょうけど、私に言わせれば、男も負けず劣らず奸策を弄しているわ。するというと、男も、女に劣らず弱いということになるのかしら。確かに、男性なら言うでしようけど、男の弄する奸計は「社会的」な場でのことなのに對して、女のは *jealousy* ないし *envy* の為せる業かも知れないわ。でも、逆に言えば、違いと言えばそれだけのことじゃないの。現に、女の奸計でも、宮廷レベルで発揮されれば人が死んだていの、立派に「社会的」なものだったのよ。でも、うちの人は（——あら、ごめんなさい。でも、「レパートリー」はこれだけなんですもの）、奸計には頼らないようよ。確かに彼も人を「乗せ」たり、また「乗った」のを見てほとんど目立たないほど（つまり自分でも気がつかないらしいほどには）それを愉快に思っているのだけど、でも奸策ではないようよ。どういふことかというので、相手に「深入り」させるのね。英語で言う *let him have his own way* で、要するに、相手の為たい（言いたい）ことの帰結を十分味わせてやりたいという、遠慮、親切、敢えて言えば社会的使命感といったものなのね（なぞって、そうした人間が余りに少ないから——つまり、そのためには、単なる空虚や空間では足りずに、積極的に「吸い取る」マイナスの力ないし空間の供給を要するのよ——そして

そのために、学生相手でも一年間でも倒れそうになるまで彼は耐えたことがあったわ。ただ、そうしてやる人が少ないのうまく見合っ
て、そうされた人はそれに余りに不慣れなものだから、結果としてそ
うした人は「法」を越え、正当化できる範囲をあっという間に越え出
て、言わば浮き足だつて我と我が足に躓いて倒れるのね。そういう経
験が余り重なるものだから、彼もその成り行きに一種独得の冷ややか
な楽しみを覚えるようなところもあるのね（と言つたつて、今言つた
ように、決してあからさまというわけじゃないのよ）。だから、彼の
場合、心構えとしては、奸計の正反対なのよ。でも、相手が躓いたら
自分が有利になつて、結果は似たようなものだと言うかも知れないけ
ど、それは違うわ。彼の場合、それはせいぜい、妨害を排除したとい
うことであつて、いずれにせよ自分のペースを保つのだと思うわ（だ
から、邪魔だという点からすれば褒める人が来ても同じなのよ）。そ
れは、賢人一流の *Fare*——釣り針——のようなものだなんて己惚れ
てるわ。「済度」のきっかけになるというわけかしら。

要するに、女のは手練手管の類で、男のは社会的・政治的なものだ
というのよ、単なる外見よ。發揮する場に「恵まれ」れば同じことよ。
しかも、それは単に「功利」のためでなく、それによって人が操縦で
きることの喜びが（これすらも「功利」なら、そういう「功利」が）
大きいという点でも男女とも同じじゃないかしら。人が人を動かす楽
しみを越えるものなんてあるのかしら。

第七章 男女の役割分担と共稼ぎ

核家族の共稼ぎ家庭なんか、本来の意味で家庭などと称すべきもの
ではない、あるいは、全く別の価値観か何かを持ってきて初めて家庭
と考えることができるというのが彼の口癖よ。これでも私なんか、店
屋物や即席食品にも、その他、御用聞き類にも一切頼らず、専業主婦
の三倍は働いているつもりだし、彼ほど家庭というものを悲観しては
いないのだけど、彼はきつと外の仕事かうまくいかない口実にでも使
っているんでしょ。でも確かに、家はちらかし放題にならざるを得な
いし、夏の衣更えの跡片付けが冬にずれ込むような具合ね。人を招く
なんてことは、空間と時間が「物理的」に許さない感じ。

これまでの文化文明は閑暇——ないし「人手」の利用可能性——の
産物で、それが断たれた現代はおしまいだなんて言ってるわ。何年か
前の石油危機と結び付いて資源の涸渇問題が騒がしかった頃、将来は
資源に比べて人手が安くなるだろうなんて言う本が出たことがあつて
（「何でも屋」なんて職業はその現れの一つかもね）、これを見て彼、
大いに意を強くしたんだけど、それほどでもなかったのがっかりし
ているわ。

チェーホフか何かに、新聞記者が夜中に物を書くのに奥さんを起こ
してお茶をたてさせるところがあつて、彼ひどく感動（？）しちゃつ
て……彼は「servant 論」でも物したいと言っているわ。

もっとも、彼自身はもう、さっき言つた「新しい価値観」の方に、
否応なく、しかもかなり積極的に肩入れしているようよ。確かに時々
は、三つ指突いてお帰りなさいませと言われてみたいなんて言うけど、

それは決して冗談の域を出たことはもちろん無いの。そして、敢えて言えば、「専業主婦」が嫌いなもの。つまり、純然たる家事取締りという意味ではともかく、「伴侶」としては、所謂「主婦」の弾まなさとでも言ったものがとてもじゃないけど物足りないということらしいのね。といったって、平均的な「主婦」なんて無い筈だから、これまで会った、あるいは読書や想像の産物としての「主婦」のことを言っているのだと思うけど、結局、共稼ぎの方は仮定や希望の問題でなく現実だから、それに慣らされたということかも知れない。(それに、彼が話相手として「物足りる」人なんて、男女を問わず至難の技ね。)

もう少し別な面もあって、一般に、日本の風習としては、主婦は「主人」と対等には言い合わなかった訳だから、多少とも物足りないのは当然なのだけど、その「ギャップ」の空隙を亭主としての貫録が昔なら埋めていた筈なんだけど、今の男性にはその貫録が無くなってきて、それは落ち着かなさと負担感として感じられてきたのではないかしら。彼もそういうことは内心が付いていて、そういう状態には耐え通せないことを予感しているのだと思うわ。「合理化」ね。

付き合い始めの頃、単なる友情なら男性だけで事足りているのだから、それが女性だということの価値を示さなきゃいかんみたいなことをよく言っていて、まるで私に恩を売ってるみたいだったわよ。それが結局どんな要求を意味していたのか、私にも、そして今じゃ恐らく彼自身にだって良く分からないのじゃないかしら。それに、そんな態度をとる元気が今じゃないわね。

——これも男性に分のない議論になりそうだ。——

第八章 女性としての母

「父と子」とは息子の問題だけど、息子と母というのはどうなんでしょう。

彼なんか母に溺愛されたと言っていていいくらい。しかも、連れ合いに對する失望感——これはどの妻にも多かれ少なかれ有るものでしょ——の裏返しのようなものが混っててもいたようだったらしいけど、彼の方ではそれに見合っただけの愛着は母親に感じなかったようなところがあるわね。それに、そういう溺愛は、彼が相当成人してから始まったらしいから尚更みたい。

それに、母に對する息子の愛着というのは、どの程度異性という意識があるものなんでしょうね。これも彼の高校の頃の日記を覗き見たのだけど、単なる異性として見るといった気の転倒(と言うべきでしょうね)の瞬間々々はあったようよ。面白い記述が実は一つあったのよ。或る朝、彼が目覚めて眼を開けて見ると、脇に母親が突っ起って彼を見下ろしていたんですって。襖で四面を閉め切った薄暗がりの中で、母親の背後から僅かに光が差している状態で、輪郭線だけ光ったシルエットが二本足を踏んばって突っ起った形になっていて、彼女の夜着全体があたかも水に濡れたゴム引き布のような光沢を帯びて見えたのだけど、それが何かひどく艶めかしく、夢のように「女」を感じさせたを書いてあったわ。

第九章 人間における性

性の意味とか、その「昇華」としての文化云々の話は、細目とはともかく、大筋では明らかだし、またそんな大それた議論はここでは場違いでしょ。

言い代えになるけど、*puberty* が異性を意識し出すことにも何の説明も要らないの。それは言わば動物と同じレベルないし原理の説明で事足りる訳ね。だから、逆説的のようだけど、人間にとっての性の説明としてはこの年代は却って不向きなのね。むしろ生理的でなく精神的、「文化的」に意識し出す年令、ということになるともっとずっとずっと溯って遙かに幼い時期ということになるでしょうね。

さっきの「母と子」で思い出すのは、何でしょ——そう、志賀直哉の自伝風のものに、小学生の頃かしら、若い継母と初めて一つ床に寝かされる話があったでしょ。そして、何だか知らないけど布団の奥へ奥へと潜っていったらその母に摘まれて上へ引き摺り出される場面があるでしょ。それは、まだ「性」とは呼べないけど、しかも何か甘味な美しい思い出として書かれているわね。同じく百閒の幼稚園の記憶にも、女の先生の回りを手を繋いで回ってお遊戯をしたあと、わつと輪を縮めて先生の袴に顔押し当てたときの感觸なんか、彼が「大入道」になった歳まで忘れられないものとして描いてあるわね。

これと関連すると思うけど——ただし、かなりもっと「むくつけき」話には属するのだけど——示唆的な事例を彼が（今度は親として）経験しているわ（彼が話してくれたの）。

彼は子供を観察するのが好きな面もあるのだけど、その朝も縊袍を

着て布団に入って目を覚しかけたところへ男の子が入ってきたので寝たふりをしていたの。そしてたまたま片膝を折り曲げて高くしていたから、布団と縊袍が大きく捲れて、——そうね、及び腰の *pornography* が観客サーピスするくらいのアングルになっていたらしいの。そしてらその子供が——まだ五ないし六歳だったかしら——この光景を見て、大きい声で「すげえぞ」とか何とか言って姉妹たちを呼びに行きかけたから、彼は「ばー」って言って「目を覚まし」て、話はそれだけのことなのだけど、そうした年令にとって性はそれ自体意味を持たず、何の *implication* も感じない筈なのに、そうした光景に子供（あの年令の）が興味を覚えた点に彼は非常な関心を抱いたわけ。

この程度のことから一般化するのには恐らく軽卒でしょうけど、でも、思うに、人間にとっての性は、やはり、単に何か異常な（尋常でない、日常茶飯的でない）、従ってまた人の隠す（「秘する」）もの、従って *mystical* ないし珍らしいものとして始まる、つまり「大脳経山」で——仮令、「右脳」であれ——始まるもののようなね。その生理的レベルの裏付けはずっと後れて生じるもののように思えるのだけど、間違っているかしら。